

「関東防空大演習を嗤ふ」から 90 年

東京新聞 4 日朝刊「こちら特報部」表題記事に注目したので抜粋して紹介したい。1933 年「関東防空大演習を嗤ふ」と題した社説で軍部の怒りを買って、信濃毎日新聞を退社した桐生悠々(1873~1941 年)。「反骨のジャーナリスト」の名を歴史に刻んだ掲載から、今年 11 日で 90 年となる。

空襲の時代と日本の破局を予見した評論は何を訴え、どんな教訓を残したのか。
(なお、社説は現代表記にした)

桐生が批判した「関東防空演習」は東京府と神奈川、埼玉、千葉、茨城の 4 県で 3 日間実施。軍官民の 10 万人以上が参加した。AK(現 NHK)のラジオで全国中継され、桐生はその放送を聞いた上で、約 2 千字の社説を書いた。

「こうした実戦が、将来決してあってはならない」「架空的な演習を行っても、実際には、さほど役立つまい」「敵機を迎へ撃つても、一切の敵機を射落とすこと能わず、その中の二三のものは、自然に、我機の攻撃を免れて、帝都の上空に降り、爆弾投下する」と強調し、本土空襲の警戒の必要性を説いた。

社説では他にも、「木造家屋の多い東京市をして、一挙に、焼土たらしめる」「関東地方大震災当時と同様の惨状を呈する」と戦争末期の惨状を予見したかのような警鐘もあった。「市民の、市街の消灯は、完全に一つの滑稽」と一蹴。

桐生としては、防空演習に意味がないと「当たり前」のことを書いたはずだが、退社に追い込まれた。大阪教育大の三輪泰史名誉教授(日本近現代史)は「軍としては痛いところを突かれたのでは。筆禍事件として桐生攻撃のキャンペーンに持ち込みたいところだろうが、それは逆に軍の無策ぶりを広く知らせることにもなりかねない。なので、新聞の不買運動をすれば圧力をかける陰湿なやり方で桐生を追い出したのでは」と推察。

晩年は空襲で人類が不戦に目覚め軍縮の時代が来ると予想しつつ、太平洋戦争が開戦する 3 カ月前の 41 年 9 月に没した。その後、日本各地への空襲や原爆投下という形で、桐生の懸念は現実となった。

翻って、現在、ウクライナや台湾の情勢を受けて岸田政権は防衛費増強に走る。北朝鮮の発射したミサイルで Jアラートが鳴り、弾道ミサイルを想定した住民避難訓練が各地で行われ、列島を有事ムードが覆う。「桐生が批判していたことを繰り返している」と歴史家の田中利幸氏は指摘し、こう続ける。

「空襲を受けたら防空できなかったのと同じように、もし核ミサイルが撃ち込まれたら防ぐことは難しい。日本が防衛費を増やせば、中国や北朝鮮を刺激し、軍拡はエスカレートする。それで日本が守れるというのは幻想だ。日本が平和主義を打ち立てるには、過去の戦争責任と向き合ってアジア諸国と誠実に対話を続けるしかない」

(2023 年 8 月 14 日)